

葉集を読む

松岡 隆子

譲り合ふベンチに五人八重桜

山口 一女

多分4人掛けくらいのベンチであろう。詰め合つて5人も座つたという。それも満開の八重桜の下と思うと何故か可笑しい。樹下ではなかったかもしれない。八重桜を観るのにちょうどよいベンチはその一つしかなかったのだらう。「大丈夫、大丈夫。みんな細身だから」などと賑やかな声が響く。華やかな八重桜の下での豊かな時間が流れてゆく。ぎゅうぎゅう詰めのベンチと八重桜の取り合せはユーモラスだ。

この椅子に戻る人なき遅日かな

梅澤 惇子

今まで目の前に居た人の姿が急に消えてしまう。それが死という現実だと分かっているも辛い。何時も向き合つて座っていた食卓の椅子はもう座る人もいない。遅日の明るさの中ぼつねんと取り残された椅子と自分。現実を俳句に詠むことで哀しみを客観視できるのかもしれない。同時作の〈風音が

夫の足音が齊咲きも切ない。追慕の思いを詠むことは自身への慰めでもある。

師系なる思ひあらたに糸桜

中谷 信子

春の吟行会で六義園を訪ねた。ちょうど枝垂れ桜が満開だった。高さ約15メートル、幅約20メートルの枝垂れ桜の咲き満ちた姿は圧巻だった。枝垂れ桜と言えば「まさなる空よりしだれざくらかな」の風生先生の句を思う。眸先生が生涯の師と仰がれた風生先生は私たちにとって遙かな存在ながら、師系の末端に繋がっている俳縁を有り難いと思う。

掲句の〈思ひあらたに〉は共感を呼ぶ。

菜の花の中へ中へと一万歩

植田喜代子

一面の菜の花畑にずんずん入って行く。やわらかな風に吹かれ甘い匂に包まれて何処までも歩いて行く。憂きことも辛いことも菜の花畑に置いていこう。もう疾うに一万歩を超えたようだ。〈中へ中へ〉のリフレインに心の昂りを見る。

鈍行の停車四分花吹雪

河本 順

鈍行とは懐かしい言葉だ。新幹線の世となつてからあまり耳にしなくなつた。「鈍行」の「鈍」には、鈍い、のろい、などといったマイナスイメージがあるが、一方、ゆっくり、のんびり、といったプラスのイメージもある。後者の時間感覚を大事に思いたい。4分間の花吹雪とは贅沢だ。